

世界一の技術を一つだけ見付たい

CNTとナノ材料に関するあらゆる開発・試作を行う「マイクロフェーズ」。JSTやNEDOなどの開発事業に採択される先端技術開発にも従事できる技術力を誇る。CNTの長尺化や燃料電池への応用、100万円台の廉価なCNT合成装置の開発も手掛ける。その驚くべき技術を持つ同社を率いるのは代表取締役の太田慶新だ。

59年に中国山西省で生まれた太田慶新は、あだ名が仏様と呼ばれるほどピュアな少年だった。好奇心旺盛で勉強好きだったが、当時の中国は勉強などできる環境ではなく、むしろ勉強すると怒られるような社会であった。世界を揺るがした文化大革命の時代である。学校での授業も政治的なことばかりで、毛沢東語録など読んで子供だからさっぱり分からなかった。徐々に授業も行われなくなり、代わりに農村や工場に手伝いに行かされるようになる。過酷な肉体労働を強いられることもあったが、文革の嵐の中でも子供は皆でワイワイと楽しくやっていた。

高校に入ればばくすると、文革も終焉となり、10年振りに大学入学の全国統一試験も復活する。文革中は大学に入学する術が無く諦めていたが、実力だけで大学に行けるようになり、嬉しくて猛勉強を開始した。1年後に行われた試験では、山西省で2番目という驚異の成績を採り、清華大学に進学した。しかし、半年足らずで同大学を去ることになる。というのは、中国から資本主義国に留学生を送り出すことになり、試験で優秀だった太田も選抜されたのである。

80年に太田は留学生として日本にやってきた。当時の日本はある意味すべてが良い時期で、健全で安全で社会のムードも良く、中国とは何もかもが違って見え

た。日本の大学では、精密計測を専攻し、そのまま修士・博士へと進む。すばる望遠鏡の開発にも携わるなど何をやっても新鮮で楽しくて仕方がなかった。大学を出ると、学部生のときに共同研究をしていた外村に誘われ、科学技術振興機構(JST)の外村位相情報プロジェクトに参加した。プロジェクトでの研究環境は恵まれていて、資金が豊富で最新技術にチャレンジでき、しかも何をやるのも自由だった。5年間に及ぶプロジェクトで成果もあげ、充実した研究生活を送ることができた。まだまだ研究したいという気持ちが強くなり、次もJSTの高柳粒子表面プロジェクトに参加した。

その後、研究者として筑波大学に勤めることになるが、この頃になると、少しずつ研究に明け暮れる日々には違和感を覚えるようになってきていた。それまで研究畑で趣味のように大量の論文を書いていたが、そんなことは自己満足でしかないと思えてきたのである。誰かが自分の論文を見るかも知れないが、それが何かの役に立っているのかフィードバックを得られないのが空しくなった。ノーベル賞を目指して研究してきたが、世界を驚かすような論文を発表できていないのも事実で、30代の後半になり、自己満足じゃ面白くないと感じるようになっていた。そこで、人生を変えるチャレンジを



しようと、99年に「マイクロフェーズ」を設立した。太田にとって、自分がやったことが正しいかどうか、目に見えるようにするためのフィードバックシステムが起業することだったのだ。しかし、何をするかも決めていないし、自分に何ができるのかすら分からない。自信などないから、最初は大学に所属しながら遊び半分のつもりで始めることにした。大学の仕事の片手間に、知人からの頼まれ仕事で、わずかな売り上げでも役に立っているという感触があると意識は変わっていった。徐々に手応えを感じられるようになり本格的にやろうと、02年に大学も辞めた。そのときも、まだ何をやるか決めかねていたが、偶然にもカーボンナノチューブ(CNT)でJSTの委託開発事業が採択され、成り行きでCNT事業を進めるようになり、会社も軌道に乗った。

太田は言う。「ノーベル賞を取る能力がないから、諦めて起業したところもある。しかし、大学などの研究室より、ベンチャーの方が質の高い優れた研究ができることが分かってきた。これから目指すのは、世界一の技術を持った会社をつくること。一つだけでいいから、ノーベル賞級の世界一の技術を見付きたい」。

(文中敬称略 山本周平)